

報告・資料

桜美林大学とコスタリカナショナル大学の 野球を通じた国際交流

宮崎 光次¹

J.F. Oberlin University and National University of Costa Rica
International Exchange Through Baseball

MIYAZAKI Mitsuji¹

要旨

桜美林大学は2015年6月に独立行政法人国際協力機構と連携ボランティア派遣事業実施で合意し、2016年から2020年までの5年間、毎年1ヶ月間、野球部員がコスタリカ共和国を訪れ、野球振興支援ボランティア活動を行うこととなった。更に、この間には、コスタリカナショナル大学を毎年訪問し、体育専攻学生を中心に交流を行っていた。

2021年度および2022年度、国立研究開発法人科学技術振興機構の事業である「さくらサイエンスプログラム」に採択され、コスタリカナショナル大学の学生、教職員を日本に招くことができることとなった。2022年2月は新型コロナウイルス感染症拡大のためオンラインでの交流となったが、2023年は2月22日～2月28日の7日間、12名が来日し「スポーツ医科学とマネジメントを科学する コスタリカ×日本野球交流」というテーマで講義、実技など行い様々な交流をすることができた。

今後も交流を継続し、お互いに理解を深め、ダイバーシティやインクルージョンを大切に、ますます友好が深まることを期待している。

キーワード：コスタリカ、野球、国際交流、JICA、
さくらサイエンスプログラム

¹ 桜美林大学健康福祉学群教授

1 桜美林大学とコスタリカナショナル大学との関係

桜美林大学（以下本学とする）は2015年6月、独立行政法人国際協力機構（通称JICA、以下JICAとする）と連携ボランティア派遣事業実施で合意し、JICA桜美林大学連携事業『コスタリカ共和国野球振興支援ボランティア連携』を実施、2016年から2020年の5年間、毎年1カ月程度、野球部員10～15名をコスタリカに派遣することとなった。

その目的は、コスタリカ共和国における野球の普及・振興に貢献することと共に、ボランティア経験を通じて異なる背景や文化を持つ人々と出会い、ダイバーシティやインクルージョンについて理解、実践できるグローバル人材を育成することであった。（宮崎光次 [2016]）。

この5年間の活動の中で毎年、コスタリカナショナル大学（National University of Costa Rica, in Spanish, Universidad Nacional de Costa Rica:通称UNA、以下UNAとする）を訪れ、ベースボール型授業普及のための活動を中心に様々な交流を行ってきた。第1回活動では、UNAにおいて野球指導を2回実施、60名の体育専攻学生が参加し講義や実技を行った。

本学学生は、キャッチボール、ゴロ捕球、フライ捕球、バッティング練習などを指導し、練習試合も行った。UNA体育専攻学生の多くが将来教員になるため、当地におけるベースボール型授業の普及に大いに貢献して欲しいと考えていた。

その後も毎年2～3回UNAを訪れ、体育専攻学生を中心に50～100名程の学生と交流を持った。この交流は、日本の野球技術、指導法を伝えるだけでなく、大学生同士が、スペイン語、英語、日本語を駆使して会話をすることで、野球以外の話題でも会話が弾み、お互いの文化や風習の共通点、相違点などに気づき、理解が深まり、年々交流は盛んになったと考えている。（宮崎光次 [2021]）

また、この間、教職員同士の交流や大学としての連携も進んだ。本事業がきっかけとなり、2022年1月1日には、本学とUNAは、包括的な学術協定を結び提携校となった。

このように交流が進む中で、UNA学生を日本に招いて、日本の文化、科学技術、そして野球をはじめとしたスポーツに触れ、学んで欲しいという気持ちが強く生まれた。

2 さくらサイエンスプログラム

(1) 2021年度さくらサイエンスプログラム

「さくらサイエンスプログラム」とは、国立研究開発法人科学技術振興機構の事業であり、世界の優れた人材を短期間日本に招き、日本の最先端な科学技術や文化に触れてもらうプログラムである（表1）。

本学国際交流センターの多大なる協力により、2021年度「さくらサイエンスプログラム」に「スポーツ医科学とマネジメントを科学する コスタリカ×日本野球交流」をテー

マとして応募、採択され、助成金をいただき、UNA学生10名、引率教職員2名（うち1名はUNAからの派遣）、合計12名を日本に招けることとなった。

表1 さくらサイエンスプログラムの目的

さくらサイエンスプログラムは、産学官の緊密な連携により、諸外国・地域の青少年を我が国に招へいし、我が国の青少年との科学技術分野の交流を行う事業です。

これを通して、

- ①科学技術イノベーションに貢献しうる優秀な人材の養成・確保
- ②国際的頭脳循環の促進
- ③日本と諸外国・地域の教育研究機関間の継続的連携・協力・交流
- ④科学技術外交にも資する日本と諸外国・地域との友好関係の強化

に貢献し、ひいては、日本及び世界の科学技術・イノベーションの発展に寄与することを目的とします。

出所：国際青少年サイエンス交流事業さくらサイエンスプログラム3)

2022年2月23日～2022年3月1日の7日間のプログラムで準備を進めていたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症の拡大で来日することができず、対面での交流ができないこととなった。

そこで、予定を変更し、2022年2月24日～2022年2月26日の3日間、8時30分～10時00分（日本時間）にオンラインによる交流を実施した。

第1日は、筆者が「Science of Baseball/Pitching, Batting」というテーマで担当した。両校の学生、教職員の自己紹介に続き、野球の投球、打撃についての講義、ディスカッションを行った。

事前に、施設紹介、打撃編、守備編、走塁編、投球編の5本の動画を作成し、講義実施前にUNAに送り、視聴、予習してもらった。

講義当日は、再度、動画を視聴しながら説明を加える形式で行った。次いで、UNA学生のコスタリカでの練習方法などについてプレゼンテーションを行ってもらった。

その後、本学学生2名、UNA学生2名、合計4名からなる少人数グループ（Group A～Group E）を作り、

- ・日本とコスタリカの野球の違い
- ・野球技術に関する質問
- ・野球文化に関する質問
- ・その他（お互いに話したい内容）

についてディスカッションを行った。

続いて、以下の内容について発表し、全体で討論した。

- ・Group A～Group Eのプレゼンテーション

- ・各プレゼンテーションの中で出てきた内容についての質疑応答
- ・全体を通しての質疑応答

最後に、今後のネットワーク構築の機会としてメールやLINEのアドレスの交換などを行った。これは、野球の技術交流も重要な目的の一つであるが、学生間の交流が進み、相互の理解が進むことも今後の発展のためには重要な要素であると考えたからである。

第2日は、本学健康福祉学群 小林至教授が「Business of Baseball, Yakyu (野球), in Japan」というテーマで、日本のプロ野球球団の運営についての講義を担当くださった。コスタリカでは野球はマイナースポーツであるため、サッカーやバスケットボールなどの他のスポーツの例を用いて、日本のプロ野球チームの経営方針の事例をわかり易く説明してくださった。

第3日は、本学健康福祉学群 鈴木秀知准教授が「Evidence-Based of Sports Medicine and Science : Breathing and Movement Screening for Baseball Players」というテーマで講義と実技を担当くださった。簡単にスポーツ現場で実施できる呼吸のチェック方法、野球のパフォーマンスを向上させる体幹、股関節周辺のエクササイズの実演を行い、オンラインではあるがUNA学生にも体験してもらった。

3日間のオンラインでの交流ではあったが、UNA学生は「私はこの交流をととても楽しみ、この機会を与えてくれたことに感謝し、学んだすべてのことをとても嬉しく思っています。ありがとうございました。そして、近いうちにあなたとあなたの国でお会いできることを願っています。」「本当は日本に行ってコースを受けたかったのですが、取り上げられたトピックはととても興味深く、私の学業と個人的な成長にとって豊かなものでした。」など非常に好意的な感想を寄せてくれた。

(2) 2022年度さくらサイエンスプログラム

2021年度の交流がオンラインになってしまったこともあり、対面での交流を希望し、2022年度も引き続き、「さくらサイエンスプログラム」に「スポーツ医科学とマネジメントを科学する コスタリカ×日本野球交流」をテーマとして応募した。

無事に採択され、UNA学生10名、引率教職員2名（うち1名はUNAからの派遣）が、2023年2月22日～2023年2月28日の7日間の日程で来日し、対面での交流と行うことができた。なお、2022年のオンライン交流に参加したUNA学生10名のうち5名が2023年の対面交流にも参加できた。

スケジュール概要は表2の通りである。

来日当日はオリエンテーション、第2日午前には本学町田キャンパスツアーを実施した。第2日午後、および、第3日午前には2022年度に引き続き、鈴木秀知准教授に、野球のパフォーマンスを向上させるための姿勢や体幹トレーニングなどのスポーツ医科学について講義、実技を実施していただいた。

第3日午前には畑山浩昭大学長、田中義郎副学長、アレクサンダー・サラス・アラヤ駐

日コスタリカ共和国特命全権大使にご臨席いただいたの歓迎会を開催、午後は小林至教授に、日本野球の歴史や特徴、スポーツビジネスやマネジメントについて講義をしていただいた。

表2 日本滞在中のスケジュール概要

2月22日 (水) 成田国際空港着、オリエンテーション
2月23日 (木) キャンパスツアー (運動施設等見学、弓道部練習見学等) 講義&実技 ① Evidence Based Sports Medicine and Science1: Breathing and Movement Screening for Baseball Players
2月24日 (金) 大学長、在日本コスタリカ共和国大使による歓迎スピーチ 講義&実技 ② Evidence Based Sports Medicine and Science2: Training Program Design to Enhance Your Performance 講義 ③ Professional Baseball Team Management in Japan
2月25日 (土) 講義&実技 ④ Science of Baseball Batting 講義&実技 ⑤ “Science of Baseball Fielding & Pitching”
2月26日 (日) 野球殿堂博物館、日本科学未来館等を見学
2月27日 (月) グループワーク、成果発表会、修了式、意見交換会
2月28日 (火) 成田空港出発

出所：著者作成

第4日は午前「Science of Baseball Batting」、午後「Science of Baseball Fielding & Pitching」というテーマで筆者が講義と実技を行った。

まず、本学学生とUNA学生と一緒にウォーミングアップを行い、その後、初心者・初級者への指導「バッティングで大切な3つの条件 (スパーシング、タイミング、グレーディング)」をテーマに実技を中心に講習を行った。ここでも本学学生とUNA学生が2人1組で実施、本学学生は適宜指導するという形式で取り組んだ。

- ① 手で相手の手をたたく (スパーシング = 空間の一致)
- ② 下手投げされたボールを手で打つ (タイミング = 時間の一致)
- ③ 素振り (バットを振る感覚をつかむ)
- ④ ティースタンドを利用した打撃 (スパーシング)
- ⑤ 下手投げでトスされたボールの打撃 (タイミング) (写真1)

続いて、中級者・上級者への指導「様々なバッティング練習 (4種類のバッティング練習)」を行った。

- ① ロングティー (グレーディング = 強さの調整)
- ② スローボールマシンを利用して緩いボールを打つ (スパーシング、タイミング、グレーディング)

- ③ ピッチングマシンを利用して変化球を打つ (スパーシング、タイミング、グレーディング)
- ④ 投手が投げるボールを打つ (スパーシング、タイミング、グレーディング)

これは本学学生2名とUNA学生2～3名が1組となり、4組が①～④をローテーションで実施、本学学生は適宜指導するという形式で取り組んだ。



写真1 下手投げでトスされたボールの打撃

午前の講習終了後、近隣の桜美林ガーデンヒルズ交流棟でUNA学生・教職員、本学学生・教職員と一緒に昼食をとり、楽しく団欒した。

午後は守備に関する講義からスタートした。

- ① スローイング (投球) の基礎である投動作の3要素「腕振り」「体重移動」「捻転運動」
- ② 捕球の基礎として「グローブの使い方」

その後、以下の実技を本学学生とUNA学生が2人1組で実施、本学学生は適宜指導するという形式で取り組んだ。

- ① 投げるためのストレッチング
- ② スナップスロー (両脚を平行に開き、脚を動かさずにスローイング)
 - 1) 同側スロー (投球腕と同側の脚を踏み出しスローイング)
 - 2) 片膝スロー (投球腕側の片膝をつけてスローイング)
- ③ 通常キャッチボール
 - 1) 相手のレベルに応じて投げるボール速度を考える
 - 2) 少しずつ距離を延ばす
- ④ クイックスロー (相手との間隔は20m程度、20秒間、3セット)

その後、ゴロ捕球の実技に移り、以下の方法で行った。

- ⑤ 転がし (本学学生とUNA学生が2人1組で実施)
- ⑥ ノック (UNA学生が3グループに分かれ、本学学生コーチ3名が各々のグループに縦ノックを実施)

守備に関する実技に続き、投球に関する以下の講習を行った。

- ① ラブソード⁽¹⁾の紹介
- ② 本学投手による投球のデモンストレーション
- ③ ラブソードを利用して本学投手の計測、計測データについての説明
- ④ ラブソードを利用してUNA学生の投球を計測 (1回目)
- ⑤ UNA学生が投球練習 (本学投手、学生コーチが適宜指導)

⑥ ラブソードを利用してUNA学生の投球を計測 (2回目)

自身が投球したボールの球速、回転率や変化量などを計測し、投球練習前後のデータを比較、技能を「見える化」することにUNA学生はとても興味を持ったようである。

講習後、野球場、クラブハウス内にあるウエイトルーム、トリートメントルーム、更衣室などを見学、その後、情報交換の時間をもち、終了した。



写真2 成果発表会、修了式

第5日はUNA学生・教職員と共に、本学国際交流センター職員2名、本学学生有志5名、筆者が参加し、午前は「野球殿堂博物館 (東京都文京区)」を見学し、展示を通して日本野球の歴史、野球の魅力や楽しさなどについて学んだ。午後は国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する「日本科学未来館 (東京都江東区)」を見学し、最新の科学技術の知識を得ると共に、気候変動をはじめとする地球規模の課題について学んだ。ダイバーシティやインクルージョンを考える良い機会になったと考える。

第6日はグループワーク、成果発表会、修了式、意見交換会を行った。

グループワークでは、UNA学生が成果発表会で使用するパワーポイントの最終調整、発表練習などを行った。午後からは、本学学生約60名が参加し成果発表会が行われた。UNA学生が5つのグループに分かれ、コスタリカの紹介、UNAの紹介、日本とコスタリカの相違点、日本での体験、学習内容の振り返りと今後の応用について発表、質疑応答が行われた。その後、修了式、意見交換会が行われ両校学生の交流が深まった (写真2)。

帰国日には、本学学生有志も成田空港まで見送りに行き名残を惜しんだ。

3 今後の交流

2023年1月、JICAと本学は、大学の学生、卒業生及び教職員を青年海外協力隊隊員、海外協力隊隊員又はシニア海外協力隊隊員として派遣する事業に関し、合意した。合意した事業の概要は表3の通り。

これにより、再び今後3年間、コスタリカ共和国において野球振興支援のボランティア活動ができることになった。まず2024年2月1日～2024年2月29日までの1ヶ月間、本学学生12名 (卒業生1名を含む) がコスタリカ共和国を訪れる予定である。現在予定しているプログラムでは2日間程度UNAを訪れ交流することになっている。

表3 コスタリカ共和国野球振興支援連携の概要

1. 案件名：コスタリカ共和国野球振興支援連携
2. 対象国：コスタリカ共和国
3. 配属先：コスタリカ野球連盟、サントドミンゴ野球協会
4. 職種：野球
5. 実施期間本覚書署名の日～2026年3月31日（ただし、双方の書面による合意の上、連携案件実施期間を延長することができる。）
6. JICA 海外協力隊区分：青年海外協力隊隊員、海外協力隊隊員、シニア海外協力隊隊員
7. 想定人数：短期10～12名 / 回×3回
8. 案件の目的
 - 1) 野球及びベースボール型体育授業を通じたコスタリカ共和国の青少年の健全な育成
 - 2) 両国の異文化理解の促進
 - 3) 派遣される学生のグローバル人材としての育成

出所：著者作成

今後も本学とUNAの交流が益々発展すること、そして、コスタリカ共和国の皆さんと私たち日本人がお互いに理解を深め、ダイバーシティやインクルージョンを大切に、ますます友好が深まることを期待している。

注

- (1) ラプソードは、Rapsodo社の製品。カメラとレーダーの技術を使い球速、回転数、回転軸、回転効率、縦横の変化量、リリース時の位置・角度などさまざまなデータの計測が可能。Rapsodo社ホームページより4)

参考文献

- 宮崎光次 (2016) 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究 (第1報) -コスタリカ共和国における野球指導-」、『桜美林論考 自然科学・総合科学研究』、第7号、pp95-112
- 宮崎光次 (2021) 「スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究 (第6報) -コスタリカ共和国における野球ボランティア活動5年間の総括-」、『桜美林大学研究紀要 総合人間科学研究』、第1号、pp167-176

<https://ssp.jst.go.jp/outline/detail/> (2023年10月25日現在)

<https://ja.rapsodo.com/pages/baseball> (2023年10月25日現在)